

幼児教育における「手あそび」の意義

——保育所実習実態調査を中心にして——

菊 池 由美子

1. 研究の課題

「幼稚園教育要領」では、4歳児から6歳児の保育内容があげられており、「保育所保育指針」では、1歳3か月未満児から6歳児までの保育内容があげられている。その中で幼児の音楽活動について、前者は「音楽リズム」、後者は1歳3か月未満児から3歳児に対しての「遊び」、4歳児から6歳児に対しての「音楽」という領域に区分している。しかも、この「音楽」は「幼稚園教育要領」の「音楽リズム」と同じ構成をとっていることに注目したい。ねらいは、両者ともに「うたう、ひく、きく、うごく、つくる」という5項目があげられている。これを幼児の音楽活動の発達と関連させてみると、幼児の発達はまず最初に「きく」活動から始まる。耳から聞くことを土台として様々な物音に反射、反応するようになり、「うごく」活動へと移行する⁽¹⁾。体の未熟な子どもたち、言葉を使って表現することがまだ十分できない子どもたちは、体を動かすことでいちばん自分を表現することが可能なのである⁽²⁾。すなわち、体を使うリズム活動が彼らの言語に代わる伝達手段なのである。子どもの生活では、音楽は言語と同様に広い表現力を持っている⁽³⁾。体を動かすことにより身体の発達、運動機能や能力の発達が促進されていく中で、子どもは徐々に言葉を覚えて使いはじめる。言語能力の発達、発声や発音の能力の向上にともない、「うたう」活動が入ってくる。さらに発達していくと、歌うことだけでは満足せず、楽器などを用いる「ひく」活動へ移行し⁽⁴⁾、だんだん増えていく知識や考える力、いわゆる知的な能力の発達、記憶だけでなく創造する力が培われるようになり⁽⁵⁾、「つくる」活動も加わって⁽⁶⁾、全ての音楽活動が一体となっていく。

幼児の音楽活動を列記したが、幼児にとって「音楽」とは何か。それは、じつにたいへん楽しい遊びであるという⁽⁷⁾。幼児にとって「遊び」とは何か。本来は自発的で創造的なものであり、誰かが教え込むものではないはずである。しかし、「遊びを指導する」ということの真の意味は、子どもが持っている自発的な遊びという潜在的意志を引き出すことと、子どもが次の遊びへと展開するために手助けをすることである⁽⁸⁾。

幼児にとって必要とされる音楽は、「幼児の生活に根ざした遊びの中の音楽⁽⁹⁾」である

べきである。この「遊びの中の音楽」の中に、歌をうたいながら手や指を動かす「手あそび」という音楽遊びがある。手あそびは、場所をとらず、道具も必要とせず、簡単にできる易しい遊びではあるが⁽¹⁰⁾、幼児期における手あそびの持つ意義は大きい。幼児期に手や指を使う訓練がなされていれば、容易に自己表現ができ、物を製作することにより創造性が豊かになり、人間形成のうえで非常にプラスになる。手先を自分の思いどおりに動かすことにより、脳の働きを促進させ、行動範囲が広がり、自己完成に役立つといわれるように⁽¹¹⁾、とても重要な意味を持っている。

そこで本研究では、幼児の音楽教育における手あそびの意義について、実態調査を通して再考することを課題としたい。その際、特に手あそびと幼児の身体的発達の関係に留意しながら考察を加えたい。具体的には、実際の保育においてどのように手あそびが導入されているのかという点について、昭和58年度生活学園短期大学前期保育所実習に伴う実態調査を通して、幼児の音楽教育における手あそびの実態を分析する。

2. 乳幼児の身体的能力の発達

人間は生後すぐに、本能的に全身運動が始まる⁽¹²⁾。生まれたばかりの新生児は、横たわったままの姿勢しかとれないが、眠っている時でさえ体のどこかを動かしている。新生児の身体的運動には二つのタイプがあり、一つは、全体的運動であり、他方は、特殊運動である。全体的運動とは、身体の内部刺激からひき起こされる漠然とした意味のない運動とか、あるひとつの刺激に対して身体全体で反応するもので、でたらめで無駄の多い、いわゆる未分化な反応行動である。特殊運動とは、いわゆる反射運動と呼ばれるもので特定の刺激にきまりきった反応、すなわち大腦を通過しないで生じるあくびなどである⁽¹³⁾。これらの身体的運動を繰り返しながら、母親の腕に抱かれたり、背に負われたりして、子守歌を聞きながらゆすられたりやさしくたたかれたりしてリズムを感じとっていく⁽¹⁴⁾。生後3か月になると、首が坐ってきて上向きから横向き、下向きになり腹ばいになったまま顎を上げ胸を上げるようになる。6か月になると、手に触れたものを反射的に握るという把握反射から眼に映ったものを把えようとする有意的把握にとってかわる。つまり新生児期の無駄の多いでたらめ反応から乳児は適切な行動がとれるようになる。これは行動が大腦によって統制され、中枢化されたことを意味する⁽¹⁵⁾。7か月になると、ひとりで起き上がる姿勢がとれるようになり、上下、左右、前後と行動半径が広がる。8か月にはいると、おすわりができるようになり、うれしい時は上体をゆすったりして体全体の動きへと変わっていく⁽¹⁶⁾。9～10か月になると、つかまり立ち、つたい歩きができるようになり、腹ばいになって前進、後進の這い這いをする。11か月になると、支えられて歩けるよう

になり、満1歳になると、盛んに手を動かし、たたいたり、ふったり、押したり、引っぱったりする自発的行動が活発になってくる。また、離乳も終わり、固形食をスプーンで食べられるようになる。一方、手や指の能力の発達は、6か月までは5本の指全体を使った握りしめしかできなかったが、7か月で拇指がはたらきはじめ、9～10か月で人差指と拇指で物を把みはじめる。さらに、音楽に合わせて手足を動かすことが積極的にできるようになる。1歳半を過ぎると、ひとりで歩き、かなり走れるようになる⁽¹⁷⁾、体全体で情動表出をし、表情豊かに喜びの表現をするようになる⁽¹⁸⁾。満2歳になる頃までには、大体走れるようになる。しかし、乳児期ではどの乳児もほぼ同じ様な動きをして成長するが、この幼児期での運動能力の発達は、幼児によってかなりの個人差が生じてくる⁽¹⁹⁾。満2歳になると、もはや自由自在に歩くことができ、転ばないで走れるようになり、わずかな時間ながら片足で立つことができるし、ひとりで階段を登り降りしたり、ボールを投げたり受けとったりできるようになる⁽²⁰⁾。また、両足をそろえて、ぴょんぴょん続けてとべるようになる⁽²¹⁾。行動範囲が広がり動きも活発になってくるに従って、リズムカルな運動を好むようになる⁽²²⁾。つまり、徐々に「うごく」活動が加わってきたことを示す⁽²³⁾。2歳半では、つま先で歩いたり、曲にあわせて歩けるようになる⁽²⁴⁾。また、曲線を描くことができ、電話のダイヤルをまわすことなどに興味を覚えるようになる⁽²⁵⁾。満3歳になると、大筋肉を動かす運動が発達してきて⁽²⁶⁾、身長と体重のバランスがとれて、運動が一層活発化してくる⁽²⁷⁾。たとえば、かなり上手に音楽にあわせてギャロップ（4分の2拍子の旋回舞曲のこと）したり、とびあがったり、歩いたり、走ったりできるようになる⁽²⁸⁾。この時期から、ひとつの曲を最初から終わりまでうたえるようになり、「うたう」活動が加わってくる⁽²⁹⁾。満4歳になると、3歳児の活動がさらに活発化され、一足とび、片足とびができ、下着の脱ぎ着や歯をみがくことができるようになる⁽³⁰⁾。4歳半から楽器をいじることに興味を示しはじめ、「ひく」活動が加わる⁽³¹⁾。満5歳になると、小筋肉を動かす運動が発達してくる。手足の一部を動かすことができるようになり、ほとんどの基礎的な運動能力も備わって、急速に発達してくる想像力とあいまって、擬人化ごっこなどを好んでやるようになり、運動の創造的な能力も伸びてくる⁽³²⁾。創造性が培われるため、「つくる」活動が加わる⁽³³⁾。満6歳になると、音楽のねらいとされている項目の総合活動ができるようになる。

以上が、乳幼児における身体的能力の発達の概略である。ここで、あらためて手あそびが必要とされる時期を考えてみたい。前述したように、生後6か月以前は、大脳によって統制されない行動のために手あそびの目的は十分に達成されているとはいえない。6か月から1歳になる頃までは、難しい手あそびができるとは考えられない。首や手を動かす

程度の簡単な手あそびにとどまるであろう。すなわち、手や指の運動の促進を必要とする時期は、生後6か月以降と考えられるが、手や指が発達してくるとともに他の身体の機能も発達してくることを見逃がしてはならない。心身が成長発達するに従って、手あそびにとどまらず、身体表現などの体全体を使う遊びを導入しなければならない。子どもにとってうたうとき、手や足や体が動くのは年齢が低ければ低いほど自然な表出方法であり、逆にいえば、手や足や体の動きを伴う歌が好きである。また、年齢が高くなれば動きも活発になり、ゲームなどの「緊張」を伴うもの、「勝負」のあるもの、運動量の多いものに熱中するといわれるように⁽³⁴⁾、年齢が高くなるに従って、手あそびのみでは、幼児の欲求が充足されなくなる。したがって、手あそびの導入は、自発的運動が活発になる2歳以降、年齢が高くなるに従って消極的になることが予想される。このことから、1歳から2歳にかけての時期が、一番手あそびの導入をする時期としてのぞましいと考えられる。

次に、手あそびを1日の保育の時間帯と関連して考察してみたい。第一に、手や指の運動を促進させることをねらいとする教材として、中心活動の時間に手あそびを導入することが考えられる。第二に、手あそびはいつでもどこでも用具も準備もなしにすぐ遊べることや⁽³⁵⁾、坐ったまま、イスに腰かけたまま、せまい場所でも体を動かしてできるといわれるように⁽³⁶⁾、いろいろな活動の短い合間などが考えられる。第三に、昼寝前のちょっとした手遊びは先生と子どもの間に信頼と安心感のかけ橋として大切な役割をはたしているということから⁽³⁷⁾、昼食後あるいは午睡前に手あそびを導入することも考えられる。

以上のことを念頭において、本学の前期保育所実習の調査票をもとにして分析を試みたい。

3. 実態調査の概要

(1) 調査期間および対象

- ① 期間 昭和58年7月20日～7月30日（生活学園短期大学前期保育所実習期間、休日を除く実質10日間）
- ② 対象 生活学園短期大学幼児教育科2年A組45名の学生に対して、調査票を用いて実態調査を試みた。その調査票の回収率は82%であった。

(2) 調査項目

調査票（資料1）の①は、実際の保育においてどのように手あそびが導入されているのかを把握するために設けた項目である。観察・参加実習期間に保育園側が導入した手あそびについて回答させた。②・③は、学生がどのような意図で手あそびを導入したかを把握するために設けた項目である。②は、部分および完全実習の期間に学生が導入した

手あそびについて、[3]は、学生が乳幼児における手あそびの目的や効果や役割をどのように考えているかについて具体的に回答させた。[4]・[5]は、手あそびの関連資料として設問した。[4]は、学生が保育園側から受けたアドバイスについて、[5]は、学生が実習を終えて音楽について感じたことをそれぞれ回答させた。

(資料1) 調 査 票

- [1] 観察・参加実習期間に保育園側が導入した手あそびをあげて下さい。

手あそびの題名	導入された時間帯	クラス(年齢)

- [2] 部分および完全実習期間にあなたが導入した手あそびをあげて下さい。

手あそびの題名	導入した時間帯	クラス(年齢)	選択理由(手あそびの種類と時間帯)

- [3] 手あそびは、乳幼児にとってどのような目的や効果があると考えますか。

- [4] 保育園側から受けたアドバイスを書いて下さい。

- [5] 実習を終えて音楽に関して感じたことを書いて下さい。

(3) 調査結果の概略

①の項目：実際の保育における手あそびの導入の実態は、年齢や時間帯は各保育園によって様々であるが、26カ所全園において実践されていることがわかった。

手あそびを導入した年齢別に分析してみると、3歳児クラスに手あそびを導入している園が19園と最も多く、2歳児クラスが17園、1歳児クラスが13園、4歳児クラスが12園、全園児が集まった時が10園、5歳児クラスが8園、0歳児クラスが2園という順序になっている。これをまとめると、1～3歳児クラスが半数以上を占めており、年齢が低いほど導入が多く、年齢が高くなるに従って手あそびの導入が消極的になっていることがわかる。ところが、年齢が最も低い0歳児クラスにおいて手あそびの導入が少なくなっているのは何故であろうか。これは、今回の調査では0歳児クラスを観察実習させてくれた園が2園にしかすぎなかったため、数値が低くなったと推察される。2園の0歳児クラスをみると、両園ともに数多くの手あそびが導入されている。この結果からみると、0歳児クラスの手あそびの導入は、100%の導入率を示すことになる。したがって、0歳児クラスは手遊びを数多く導入していると予想できる。

次に、手あそびを導入した1日の保育の時間帯別に分析してみると、「中心活動」が19園と最も多く、「中心活動の前」、「降園」、「午睡の前」が12園、「登園」が11園となっている。さらに、「昼食の前」、「お誕生会やお別れ会」、「おやつの前」、「おやつの後」、「自由遊び」、「集会の前」、「午睡の後」、「中心活動の後」の順に並んでいる。1日の中で保育のねらいの大半を占めるといわれる「中心活動」において手あそびが最も多く導入されているのは言うまでもない。すなわち、手や指の運動を促進させて、脳の発達や心身の発達や言語の発達を目的として行っていると考えられるからである。「中心活動の前」では、中心活動に関連した手あそびを導入している。このことから、手や指の運動を促進させることはもちろんのこと、子どもたちの興味をひく目的をも含まれていると考える。「登園」、「降園」、「昼食の前」、「おやつの前」、「おやつの後」、「集会の前」、「中心活動の後」などの短い時間における手あそびの導入は、幼児の気分転換をはかりながら集中させること、あるいは静かにさせたり、きちんと整列させたりしていることがうかがえる。「午睡の前」、「午睡の後」は乳幼児と保母の信頼関係をはかり、乳幼児を安心させるために手あそびを導入していると考ええる。「お誕生会やお別れ会」、「集会の前」は、全園児が集まる機会であり、皆と一緒に遊ぶ楽しさを味わうことができることを目的にしていると考えられる。以上のことを整理してみると、手あそびの導入のねらいは次の5項目にまとめることができるのではないか。① 幼児の手や指の運動を促進させる ② 幼児の興味をひかせる ③ 幼児の気分転換をはかり、集中させる ④ 幼児と保母の信頼関係をはかる ⑤ 集団

における楽しさを味あわせる、と考えられる。

①の調査結果から、手あそびの導入のねらいをどこに重点的におくかによって、年齢や時間帯が選択されているように思われる。

②の項目：学生が保育の中で手あそびを導入したのは、26園中19園であった。手あそびを導入しなかった学生は、「手あそびを導入する時間や機会がなかった」、「手あそびよりも絵本に興味を持っていた」、「部分および完全実習が全くなかった」などを理由にあげている。

①と同様に年齢別に分析してみる。学生が全園児を対象に手あそびを導入したのが11園と一番多く、3歳児クラス、4歳児クラスが8園、5歳児クラスが6園、2歳児クラス、1歳児クラス、0歳児クラスが2園と並んでいる。①の結果とは異なり、全園児が集まった時に手あそびを多く導入しているのは、お誕生会や学生のために行うお別れ会などで、学生に催し物をさせる園が多いことが推察できる。その際、学生が簡単に導入できる手あそびを選択したと考えられる。0～2歳児クラスにおいて手あそびの導入が少ない原因は、0～2歳児クラスを学生に担当させる園が少ないということが調査結果からうかがえる。

次に、学生が手あそびを導入した1日の保育の時間帯別に分析する。「お誕生会やお別れ会」に手あそびを導入したのが12園と一番多く、「午睡の前」が11園、「中心活動の前」が6園、「中心活動」、「降園」が5園である。さらに、「自由遊び」、「昼食の前」、「登園」、「集会の前」、「おやつの前」、「おやつの後」などがあげられている。「お誕生会やお別れ会」に多く手あそびが導入されているのは、前述した理由と考える。「午睡の前」は、幼児と保育士の間に信頼と安心感を与えるよい機会である。すなわち、幼児と学生は10日間という短い期間しか接することができないため、お互いの隔たりをより早くなくさせようという保育園側の配慮から、「午睡の前」の時間を学生に担当させた園が多く、その際に手あそびを導入したと推察する。「中心活動」に手あそびを多く導入した理由は、①と同様のねらいを設定したためと思われる。その他にあげられた短い時間における手あそびの導入は、部分実習の一端として学生に担当させた園が多いことがうかがえる。

①の実際の保育で導入された手あそびと②の学生が導入した手あそびの年齢や時間帯に差異がみられた。②の場合、学生は自分自身で自由にクラスや時間を選択しているわけではない。すなわち、保育園側から与えられた部分および完全実習という限られた条件の中から選択しなければならないわけである。このことから、①と②の結果に差異が生じたと思われる。

学生が手あそびを導入した選択の理由について分析してみる。「集中させるため、静かにさせるため」という理由が15名と一番多く、「次の活動に関連しているから」が10名、

「歌詞の内容がおもしろく、子どもたちが好みそうだから」が9名、「短くて簡単で覚え易く全員でやれるから」が8名、「前に導入して皆が知っているから」が7名でほぼ半数を占めた。そして、他には「子どもたちが気にいっているから」、「前の活動と関連させるため」、「ふりが大きく動きがあるから」、「あきないように変化をつけるため」、「幼稚園実習を参考にした」、「指の運動をさせるため」の順に並んでいる。あまり感心のできる理由ではないが、「時間があまったから」、「何となく」、「とっさに出来るものが思いあたらなかった」という意図のない手あそびを導入した学生が数人いる。「静かにさせるため、集中させるため」が一番多いのは、保母のみならず学生においても手あそびをすることによって、実際に子どもたちが集中して静かになったという結論が裏づけられたためである。「次の活動に関連しているから」は、子どもたちの興味をひいて内容をもりあげようとする学生の意図がうかがわれる。「前に手あそびを導入して知っているから」については、子どもたちからのリクエストなどがあるためにあげられたようだ。「あきないように変化をつけるため」は、子どもたちが物事にあきやすい性格であることからであろう。

③の項目：学生は、乳幼児における手あそびについてどのような目的や効果があると考えているのかについては、「気分転換をさせて集中させる」という効果があるという学生が9名と一番多く、「手先を動かして器用にさせるとともに、脳の発達、心身の発達、言葉の発達を促進させる」が7名、「友情のつながりを深める」が6名となっている。その他に、「歌詞から自然に物事を覚える」、「すわったまま手軽にできる」、「次の活動の導入として興味をひく」、「リズム感を養う」、「想像力、表現力を育てる」、「情緒を安定させる」という順になっている。いずれも、実際の実習の経験に基づくものが一番多く、他には担当教員からのアドバイスの内容に基づくものなどからきているようである。

④の項目：園から受けたアドバイスについては、「できるだけたくさん之歌や手あそびなどを覚えてきて、子どもたちに教えてほしい」を筆頭に、「新しく導入した遊びはいろいろな活動に導入して、繰り返すことにより子どもたちの興味をひかせるように」、「子どもの発想を重視するように」、「個人差を十分に考慮するように」、「子どもと一緒に楽しく歌ったり、おどったりするように」、「生活そのものがリズムであることを忘れないように」などがあげられている。

⑤の項目：実習終了後、学生が音楽リズムに関して感じたことは何かについては、次の通りである。「子どもたちは、体を動かすことを喜ぶ」、「リズムカルな曲を好む」、「音楽を重視している」、「音楽を重視していない」などがあげられており、これらは実習の経験からあげられた内容と思われる。「歌や手あそびをもっと覚えなければならない」、「乳児に手あそびは必要である」、「積み重ね、繰り返しが必要である」、「子どもになりきらな

ければならない」などは、④の結果からもわかるように、アドバイスをうけた内容と大体一致している。その他には、「ピアノがもっと上手にひけなければならない」などの内容があげられている。

4. 事例報告

前述した調査結果をもとにして、数園の事例を紹介してみたい。

(1) 事例A

本学学生2名が、1～4歳児の各クラスにおいて観察実習を試みた。

A保育園では、1・2歳児の各クラスで「登園」と「降園」に手あそびを導入している。3歳児クラスにおいては、「中心活動」に1回、4歳児クラスにおいては、「お集りの前」に1回導入しているだけである。年齢が低いほど手あそびが多く導入されていることは明確である。手あそびの内容をみると、毎日同じ時間帯に手あそびを導入しているようだが、日によって違った手あそびをするために、おのずと種類が豊富になっている。そして、単に種類が多いだけではなく、歌詞の内容の傾向も同種にかたよらず多種多様である。レパートリーが多いということは、幼児にとって、あきることなしに様々な事を自然に遊びながら覚えていくことができると思われる。

したがって、この園の手あそびの導入のねらいは、1・2歳児における手や指の運動の促進を重要なポイントとしていることと、幼児の気分転換をはかり、集中させることの2点が考えられる。

(2) 事例B

本学学生1名が、3歳未満児クラスと3歳児クラスにおいて観察実習と部分実習を試みた。

B保育園では、3歳未満児クラスと3歳児クラスにおいて「中心活動の前」にのみ手あそびを導入している。手あそびを導入した回数を比較すると、3歳児クラスの方がより多く導入されている。また、「集会の前」は、全園児で手あそびをしている。

B保育園の手あそびの導入のねらいは、3歳未満児および3歳児における幼児の興味をひくことと、全園児で行う集団における楽しさを味わうことの2点にポイントをおいているようだ。

(3) 事例C

本学学生2名が、1～5歳児の各クラスにおいて観察実習と部分実習を試みた。

C保育園では、1・2歳児の各クラスにおいて「登園」と「降園」に手あそびを導入しており、3～5歳児の各クラスにおいては全く手あそびを導入していない。また、全園児が

集まる「お誕生会」や「礼拝」などに入る前に必ず全園児で手あそびを行っている。C保育園の特徴は、他の園と比較して各クラスにおいて手あそびをすることよりも、全園児で行う手あそびの方が圧倒的に多いという点である。

したがって、C保育園の手あそびの導入のねらいは、1・2歳児における手や指の運動の促進の他に、縦のつながりに特に視点をおいて、全園児が一緒に手あそびを行うことによって集団における楽しさを味わうことを重要視しているようだ。

(4) 事例D

本学学生2名が、2・3歳児の各クラスにおいて観察実習と部分実習を試みた。

D保育園では、手あそびを導入する時間帯が特に決まっておらず、日によって異なり、「登園」、「降園」、「中心活動の前」、「絵本を読む前」など様々である。しかし、導入されている傾向をみると、子どもたちを集中させたい時や子どもたちの興味をひきたい時に手あそびを導入しているようである。

したがって、D保育園の手あそびの導入のねらいは子どもたちを集中させることと、興味をひくことの2点にポイントをおいているように思われる。

(5) 事例E

本学学生2名が、0・3歳児の各クラスにおいて観察実習と部分実習と完全実習を試みた。

E保育園は、学生に0歳児クラスを観察実習のみならず、部分実習および完全実習を体験させてくれた。0歳児クラスでは、特定の時間帯はなく「自由時間」、「おやつの前」、「昼食の前」、「中心活動」などに手あそびを導入している。一方、3歳児クラスでは、「降園」のみしか手あそびを導入していない。0歳児クラスを中心に分析してみると、「おやつの前」や「昼食の前」は乳児を集中させることよりも、保育者がそばについて乳児の食事の援助をすることから両者の信頼をはかることが考えられる。「自由時間」や「中心活動」は、乳児の手や指の運動を促進させることは当然と考えられるが、他の年齢と比較すると手あそびの導入が積極的になっている。このことから、0歳児における手あそびの意義は大きいことがわかる。

以上の事例から、それぞれの保育園によって、手あそびの導入のねらいが異なっていることがわかった。さらに、同じ保育園においても年齢によって手あそびの導入のねらいが異なっていることも判明した。これは、各年齢の身体的能力の発達からみれば当然の結果と言えよう。したがって、手あそびのねらいをどこにおくかによって年齢や時間帯が選択され、実際の保育において手あそびが導入されていることがうかがえる。

5. む す び

今回の調査から考察すると、保育園によって音楽活動が積極的な園と消極的な園の差異があることは否めないが、年齢が低いほど手あそびの導入が多く、年齢が高くなるに従って手あそびの導入が少なくなっていることが推察できる。このことからわかるように、0～3歳にかけての時期が、手あそびの導入する時期としてのぞましいと考えてよいと思われる。

推察した手あそびの導入のねらいについては、実際の保育の中で実践されていることがわかった。しかし、羅列したねらい全てを網羅している保育園はみあたらなかった。圧倒的に多かった手あそびのねらいは、やはり「手や指の運動の促進」であり、その他のねらいは付属的なねらいだったように思われた。

今回の調査は予備的なものであり、保育所における幼児の手あそびの意義について長期にわたり、もっと深く探求していかなければならない。時代の変遷にともなって、どのように即応しながら音楽教育における手あそびを導入していけばよいのか。それが、今後の研究の課題となるであろう。

注

- (1) 音楽之友社編「音楽リズム教育法——幼児の新しい歌 102——」音楽之友社 1983年 10頁
- (2) 小林美実著「たのしい音楽あそび」あすなろ書房 1979年 9頁
- (3) 糸賀英憲編「乳幼児の音楽リズム指導」北大路書房 1979年 78頁
- (4) 音楽之友社編 前掲書 10頁
- (5) 小林著 前掲書 9頁
- (6) 音楽之友社編 前掲書 10頁
- (7) 小林著 前掲書 7頁
- (8) 今井弘雄著「指あそびタン・手あそびボン」黎明書房 1978年 7頁
- (9) 池内友次郎監修「幼児の音楽教育法(四訂版)」音楽教育研究協会 1981年 8頁
- (10) 今井弘雄著「指遊び・手遊び・ジャンケン遊び」童心社 1979年 11頁
- (11) 同書 10～11頁
- (12) 森田百合子他著「幼児の音楽教育——音楽リズム——」教育芸術社 1983年 14頁
- (13) 糸賀編 前掲書 42～43頁
- (14) 高橋大海編「幼児と音楽リズム——音楽リズム指導の理論と実際——」相川書房 1981年 8頁
- (15) 糸賀編 前掲書 43～44頁
- (16) 高橋編 前掲書 8頁
- (17) 糸賀編 前掲書 47～48頁
- (18) 池内監修 前掲書 13頁
- (19) 高橋編 前掲書 8頁
- (20) 糸賀編 前掲書 49～50頁

- (21) 高橋編 前掲書 95 頁
- (22) 池内監修 前掲書 13 頁
- (23) 音楽之友社編 前掲書 10 頁
- (24) 高橋編 前掲書 95 頁
- (25) 糸賀編 前掲書 50 頁
- (26) 森田著 前掲書 14 頁
- (27) 池内監修 前掲書 8 頁
- (28) 同書 14 頁
- (29) 音楽之友社編 前掲書 10 頁
- (30) 糸賀編 前掲書 51 頁
- (31) 音楽之友社編 前掲書 10 頁
- (32) 森田著 前掲書 14 頁
- (33) 音楽之友社編 前掲書 10 頁
- (34) 小林著 前掲書 72 頁
- (35) 今井著 童心社 前掲書 11 頁
- (36) 小林著 前掲書 73 頁
- (37) 今井著 童心社 前掲書 11 頁